■特集＝福岡人物誌⑦■

光頭無毛文化財・田中諭吉の生涯

福博大衆文化の近代史

田中美帆（たなかみほ）

祖父・田中諭吉が亡くなったのは、私が生まれる九年前ですので、私は全く祖父に会ったこともないのですが、小さい頃から祖父の面白おかしい仕事ぶりを父から聞いておりました。彼が手がけた主な企画は、「新天町商店街」や、太宰府の「曲水の宴」、博多祇園山笠の「集団山見せ」、「永代奉納番外飾り山笠」などです。「有無庵（ユーモア）」と自称していた諭吉は、人を驚かすような奇抜なアイデアを次々に思いつき、仁和加（にわか）で人を笑わせ、自分も愉しみ、生涯ユーモアを追求し続けた稀代のアイデア・マンだったそうです。

今回は残された資料をもとに、戦後の福博の町の復興に尽力した文化人の一人として、彼の手がけてきた企画や作品を整理し、年譜を作りながら、福博の大衆文化の近代史を見ていきたいと思います。

＊

田中諭吉は明治三十四（一九〇一）年、博多・川端の焼物屋の長男として生まれました。青年時代は貧しく、十六歳で父親を亡くし、満足に学校に通えなかったようですが、独学で書画を学び、二十七歳で新聞社に入社してからは、水を得た魚のように次々と面白い企画を思いつき、実行していったようです。

昭和三年十月に福岡日日新聞社（のちの西日本新聞社）に入社し、編集局社会部絵画班の駆け出しの頃、ちょうど昭和天皇御大典の年で、福岡県が宮中での亀トの卦で、S郡Y地区が主基斎田（すきさいでん）の処に選ばれ、新聞では連日、県下の光栄を讃え、東京電話や、初めての電送写真などで伝えていたそうです。

このS郡Y地区に末社をもつ官幣大社宗像宮は、社格としては県下では一番高いのですが、当時交通不便な辺地にあったため、あまり人には知られていなかったようです。そこで当時の宮司さんと禰宜さんが、新聞社を訪れ、主基斎田に当てられる地域にある末社を由縁として、これが祭祀を宗像宮が盛大に出張して行い、併せて、古来よりこの社の大宮司はこの神霊の加護で、国内・海外と交易した由緒があり、船旅・陸旅の交通安全の祖神であることを一般人に新聞をもって宣揚してほしいとの申し出があり、新聞で読み物記事を数日にわたって連載し、当時漸く増え始めた自動車の安全祈願は「宗像宮で」とのスローガンを普及させていったそうです。これが今では交通安全祈願の神社として定着した宗像大社です。

田中諭吉

戦前は、日本の国際連盟脱退を受けて入手したリットン報告書を呼び物にした「非常時局大展覧会」[1]（五・一五事件の後。「非常時」は当時の流行語だった）や、仏教各宗の輪番奉仕による「支那事変初盆大追悼会」[2]などを行い、当時の市民の感情の機微をとらえた企画でしたが、憲兵隊には睨まれていたようです。二・二六事件の直後であった「支那事変初盆大追悼会」は、遺族より届けられた戒名書きを期間終了後、憲兵隊立ち合いのもとで焼き捨てるという条件のもとに開催されました。

当時の「福岡日日新聞」（現「西日本新聞」）は、その伝統の社是に従い、「軍事と政治は絶対に切り離されるべきこと」という根本方針を貫いていたため、軍部（特に青年将校）からの圧力が激しく、久留米師団の将校からは電話や投書は勿論、軍用機で社屋を低空威嚇飛行などで脅迫されたりもしていましたが、当時の「福日」の論説は屈しなかったそうです。

しかし、この「支那事変初盆大追悼会」の開催期間の中頃で、儀礼的な意味もかねて、主催の新聞社側が当時の久留米師団長並びに幕僚数名を招いて懇親会を開いたところ、わだかまりが解け、予期していなかった一種の政治的な効果があり、軍側と新聞社側の和解の契機になったそうです。

大東亜戦争開戦後、昭和十七年の秋（九月中旬～十月下旬）に百道松原（現西福岡警察署横）で開催した「大東亜建設博覧会」は、国民をして軍に協力してもらう政策的な意味もあり、当時かなり物資不足であったのにもかかわらず、軍側が大いに支援したため、本館など数棟、朝鮮、台湾、満州国の特設館を建設し、当時としてはかなり規模の大きなものとなり、期間中は五十－六十万人

もの人出で大盛況だったそうです。

しかし、この博覧会の準備期間中（八月中旬）、一夜の暴風によって会場の六、七棟が倒壊して、再建のために大きな損失となり、あたかも大東亜戦争の結末を象徴していたかのようでした。

けれども、この博覧会企画事業が今日の西新町の繁栄をもたらすきっかけとなったことは、誰も予期していなかったそうです。というのも、企画の準備段階で開催地として諭吉が百道の松原跡の空き地を物色し、社側に決定させ、新聞紙面で発表したところ、博覧会開会までに、東邦電力（西鉄の前身）が市内電車の城内線（単線）を複線に完成させたのでした。

これらの企画は国家の方針や世論に合流し、情勢のタイミングにあったアイデアで広く市民に受け入れられ、当時の社会が要求するものだったのです。

＊

諭吉は若い頃から「絵馬」に関心があったようです。絵馬の歴史は古い文献によると、往昔、神馬として馬を奉納したものが、経済上の理由もあって普通人では成し得ないので、馬を描いて大小の額とし、祈願のため、あるいは祈願成就を感謝するため、神社に奉納したそうです。

絵馬の内でも、祈願を目的とする小絵馬などは、自己の名を現さないのですが、諭吉は、戦争絵や忠臣烈士や殊勲の人などが描かれた絵馬は、精神作興の資とすべく考慮されたもので、一面現代のポスター的役割を持つ意義があるものと考え、このアイデアをヒントに新聞広告とタイアップして、スポンサーの名を入れた大絵馬を福岡各地の由緒ある神社に奉納する協賛企画を立てました。時代が時代なだけに、絵馬の主題も「祈皇軍武運長久」とか「感謝皇軍戦勝」といった、情勢に合致したテーマで広告募集をしたようです。当時、新聞社内では「神罰をも恐れぬこと」と反対する者も多かったようですが、今ではスポンサーの名の入った奉納品というのはごく当たり前のものとなりました。

戦争も苛烈になった昭和十九年の中頃、増改築の竣工した宇佐神宮（大分県）の記念に、何か新聞社によって戦勝祈願的または士気作興的な催しをやってほしいとの大分県からの依頼があり、諭吉は早速一つの企画を立てました。それは、宇佐神宮の造営竣工記念と併せて戦勝祈願を行うものであり、当神社の社伝として歴史にも有名な和気清麿が宇佐八幡のご神託によって皇統の正しさを明らかにし、道鏡の野望をくじいて、大隅に流された事績などを物語る「和気清麿一代記画」十五面と「元寇覆滅図」二面の計十七面の畳敷大の油絵を奉納するという企画です。

当日は、各画面を仕丁にかつがせ、各町内から稚児行列、先頭は伶人の雅楽行列で、宮司は白馬に跨り、神職これに続いて、氏子らが粛々として二キロ余りを練り、神社に到着して奉納祈願祭を行ったのですが、物資不足であるにもかかわらず、県側の斡旋で相当量の酒、米、砂糖などが用意され、地域の婦人会員らの奉仕で盛大に行われ、当時このような催しに飢えていた宇佐町民がこの企画を特に歓迎し、協力してくれたそうです。

この大油絵奉納企画に協力した百数十名に対する記念品を主催者側として何か適当な物を贈呈すべく、統制時代で物資不足の状況下、余った予算の中から諭吉は思案し、「勝土器」と題して、祝部（ほうりべ）土器になぞらえた、「勝」の文字を彫り込んだ高取焼を百数十個作って贈ったそうです。この記念品は好評を博し、その後、宇佐神宮ではこれの小型のものを作って「勝土器」と称して参拝記念のみやげ物として売り出したそうです。奉納した大油絵十七面も、拝観料や絵葉書などで、その後の神社収入の財源となったそうです。

この宇佐神宮の油絵奉納企画の打ち合わせ中に、諭吉はまた別のアイデアを思いついたようです。当時は既に敗戦の色濃く、次々に輸送船が沈められていることは、大本営がいくら隠そうとも国民の間ではうすうす分かりつつあったようで、軍器や物資を運んでいる船員たちの士気も著しく衰えていました。往昔、瀬戸内海から九州沿岸に発生した倭寇は「八幡大菩薩」の旗を船頭にたてて勇敢に大陸に押し渡ったといわれています。この故知にならって、造船業者や輸送関係業者に出資させてこの旗を作り、当時の福岡県知事吉田茂氏と宇佐八幡宮司に「八幡大神」の文字を肉筆揮毫させ、八幡さまの航海安全祈願と、船霊（ふなだま）さまとして祭る、有名な筥崎宮の神額「敵国降伏」の縮小掛軸と合わせて、輸送船に贈るという企画を立てました。

統制品である布地は賛同する県庁の特別配給切符の提供で、約五百個分の旗が出来上がり、宇佐、筥崎八幡宮の神前に供え、航海安全祈願の祭りを行い、両神社の護符と新聞社、協賛者の激励文を添え、九州各県の機帆船主、造船所などに各県市を通じて寄贈したそうです。この激励は、敵制海の中を航行していた輸送船の船員たちの士気昂揚に役立ち、敬神的な気持ちで勇躍任務につくといった心理的効果があったそうです。

このように明日をも知れない戦争の苛烈下では、神にもすがりたい民衆の思いをとらえ、神仏を利用した企画

をずいぶん行っていたようです。諭吉本人は右に与するものでもなく、特に信仰もなかったようですが、民衆の喜びそうな神仏行事を企画するのが得意でした。

しかし、昭和十八年当時、妻が五人目の子ども（私の父）を身ごもっていた頃、諭吉の家庭も食糧難にあえいでいました。初めは家財道具を農村部で食糧に換えていましたが、それもなくなり、当時息子が出征している農村部では「虎は千里行っても千里帰る」という言い伝えで「虎の画の掛軸」が引っ張り凧だとの話を聞きつけ、書画の巧みな諭吉は、不謹慎とは思いながらも一家の飢えを凌ぐにはやむを得ないとして「虎の画の掛軸」を描き、食糧と交換して家族の食をつないでいたそうです。息子たちを戦場から無事に帰らせたいと願う親心は藁にもすがる思いで、食糧と引き換えにこの「虎の画」のお守りを求めたそうです。

こうして田中一家は、何十匹もの「虎」を食って生きのびたのでした。諭吉本人には、終戦日ちょうどに赤紙召集令状が届いたため、あやうく徴兵を免れました（終戦当時四十七歳）。

新天町商店街誕生

終戦当時、諭吉のいた西日本新聞社内の「戦時対策本部」は、「戦後対策本部」と名称が代わり、戦後の社内外の企画立案をすることになりました。当時は占領米軍による軍政下とはいえ、市内大部分の焼け跡は、食料品や生活必需品不足から、自然発生的に生ずる露店、闇市場があちこちにできていました。諭吉ら戦後対策本部員は、現在の西鉄福岡駅の西側に福岡県と福岡市有の旧女専焼け跡の瓦礫の山数千坪の空き地があり、そのまま放置されているところを整地して、明朗な商店街をつくることによって、福博の焼けた中小企業の復活を図ることと、また西日本新聞社の別館で合併前の九州日報社跡（当時保険局などの官庁が借りていた）が何だか占領米軍に接収されそうな危惧があった(?)ので、これを防止する意味でこのビルを西日本会館と名付け、三階をアメリカ映画上映、二階を占領軍兵士のダンス場にし、一階を一般市民に安く食事を提供する大衆食堂に改造するなど、米軍の機嫌を取り結ぶ、うろたえた企画を立てました。

昭和二十年十月初旬、次長と諭吉が英訳した企画書をたずさえて、大学生の長男を通訳として、現在の天神町千代田ビルにあった福岡軍政部に司令官を訪ねたところ、参謀長のバロー大佐が快く引見してくれ、当方の申し出は、市内のブラックマーケット撲滅の一端を果たすこと

と、米軍政に協力する機宜の企画であるとの理由で県庁の渉外関係の課を通じて許可を下げてもらえました。

しかし、膨大なる瓦礫の山は、数千の人夫を用いなければ平地にすることができず、当時は復員前の人夫不足で、この費用の捻出にも苦悩しました。そこで諭吉は、東京で米軍が市民のために米軍工兵隊のブルドーザーで整地したという記事を思い出し、また板付航空基地でも働いているという聞き込みがあったので、当たって砕けろの意気で、再びバロー大佐の所へ赴いて、現下の人手不足の点を指摘して、東京のようにブルドーザー動員整地の申し出を行ったのです。

これが以外にも先方に好感をもたれ、大佐は即座にブルドーザー要請の電話をかけ、それから三日後、毎日二人のGIがブルドーザーを持って来て操作し、一週間で完全に整地が完了したのでした。このブルドーザーの運転状況を、毎日黒山のような市民が見物しに押しかけたそうです。このとき、米軍の軍人らしからぬ気取らぬ態度と、事務をテキパキ処理する実行力に諭吉らはすっかり感嘆し、日本軍や日本役人の繁文縟礼の、事務の渋滞ぶりでは勝てなかったはずであると痛感させられたそうです。

この商店街は初め「西日本公正商店街」と名付けられましたが、後に現在の「新天町」と改名し、その後二回の一部火災もうけましたが、そのうち二十数軒も増し、町内結束して、博多っ子らしい売出しや斬新な企画による催しなどを行い、戦後の福岡市の繁栄の中心となったのでした。神仏ではなく、今度は米軍の力を利用して、戦後の焼け跡の中からこの商店街企画を成功させることができたのも、市民の復興と米軍の嫌う闇市場の撲滅という大義名分をかざし、こちら側の真実の衷情を訴えて、大きな同情を買うことができたからなのかもしれません。

「志賀島水族館」誕生

昭和二十五年、戦後初めて許された日本の捕鯨団が南氷洋で世界第一位に値する漁獲高をあげたという朗報もあり、諭吉が「躍進日本水産展覧会」を企画していた頃、当時初当選したばかりの志賀島村長から、志賀島の観光行政に協力してほしいとの依頼がありました。

そこで諭吉は、水産展の展示会場である天神のデパートの他に、天神で展示しきれなかった出品物を第二会場として志賀島に展示し、さらにこれを呼び物として志賀島に仮設水族館をつくりました。これが大変な賑わいを見せ、この仮設水族館をきっかけに、翌年の志賀島の村会で村営による恒久施設の大規模水族館の建設が可決さ

れ、翌々年の夏には西日本最初の「志賀島水族館」が完成しました。以後、志賀島は町制となり、連絡船で博多湾を渡って志賀島に観光に訪れる人々も増え、宿泊施設や海水浴場の整備も充実し観光業が発展していったそうです。

新柳町繁栄企画

昭和二十五年頃、昔から遊郭街として有名だった新柳町（今の柳橋―清川付近）は、終戦後、特飲街として昔の面影をしのばせる程度になっており、再び往年の新柳町の繁栄に戻すべく協力してほしいとの依頼が新聞社社長のところにありました。社長は、新聞の性格上、赤線内の事業後援は新聞社では行われがたいことを話して、諭吉に紹介し、個人的な形でこの事業に協力することになりました。諭吉は企画をするにあたって常に、その土地にまつわる故事来歴を調べる習慣があり、この新柳町の歴史もかなり詳しく調べていたようです。

もともと遊郭柳町は今の石堂川河口付近にあり、九州帝国大学の誘致のために、明治四十二（一九一〇）年、風紀上これを隔離すべきとして辺地に移転させることが市会で決議され、当時の福岡市外筑紫郡住吉町大字住吉の田畑を買収して移転させ、新柳町と名付けたのでした。

この新柳町の以前の柳町には、およそ三百数十年前に明月太夫という、親孝行で知識も広く、芸事にも妙手の素晴らしい美人の花魁（おいらん）がいたそうです。明月は仏教に帰依して、死ぬまで十数丁もある萬行寺（現博多区祇園町）という名刹まで、朝早く廓（くるわ）をぬけてお詣りをするのを欠かさなかったということから「名娼明月」と名付けられ、その寺に伝説が残っています。

それは彼女の死後、初七日に墓の下から蓮の茎が出て花を開いたので、不思議に思った和尚が使用人に墓の中を開けさせると、なんと合掌した明月の死骸の口の中から蓮の茎が出ていたのです。今でもその蓮の乾燥したものが納められた硝子の壺が寺宝として大切に秘蔵され、この世にも不思議な信仰物語は博多の町の代表的伝説となり、土産物の名称や店名にまでなっているほどです（明月堂）。

そこで諭吉は、この史実を新柳町繁栄企画に盛り込み、明月の詳細を郷土史家の和尚にたずね、「三百七十年忌、明月まつり」と題し、仲秋の明月の九月中旬を選んで、この新柳町で昔の風俗を再現した「おいらん道中」を行いました。同時に萬行寺住職を導師として供養行事が行われ、玉屋デパートでは明月関連の寺宝や、ゆかりの遺品、柳町に関する資料などが公開されました。この「おいらん道中」は珍しい風俗行列として、三日間未曾有の人出を生みました。

しかし、この花街も昭和三十四年三月限りで、「売春防止法」施行のため、火の消えたような寂れ方になりました。その後、この新柳町を東部に付近十数カ町が集まって、「南都振興会」という団体が結成され、かつての賑わいを呼び戻すべく、地域の繁栄企画が立てられ、諭吉もその相談を受けるようになりました。

終戦後、福岡市に「山笠」が復活すると、この南都地域も山笠を十余年間毎年建設し続けてきたのですが、町費の別途積金や寄付金でまかなわれている山笠建設費用はかなりの額を要するので、昭和三十五年頃になると、町内には異論を唱える人も多くなり、投票の結果、少数の差で、この年の山笠建設は見送ることになりました。

代案として、中央交通の激しい位置に公益的な信号機を県の補助金を加えて建設することに話が決まりました。しかし、観光的な意味をもつ飾り山笠建設は、その期間中の人出によって商店街や市場街、料飲街は営業的にかなり潤うので、この信号機建設企画では納まらない業者の人たちもかなりの数にのぼっていました。この地域には、旧遊廓街の家屋を転業した旅館や、飲食街のみならず、商店街、映画街、連合市場、住宅街、九州でも有数の大会社の本社や銀行の支店、商事会社などもあり、多彩な特色がありました。

そこで諭吉は、この南都地域を構成する各町の性格を識り、すべての業者が納得のいく企画を思案し、昔の柳町から今の新柳町に移った史実をふまえて、「福岡南都開創五十周年記念、南都まつり」を行い、料飲街と商店街、市場街を融和結束させるという効果をもたらしました。この時つくられた「新作南都おどり」も町内の婦人会からの評判がよかったようです。

「福岡光頭会」発足

昭和二十五年十一月、諭吉は若い頃からコンプレックスであった禿頭を、ユーモアに変えて自慢しあう「福岡光頭会」を結成し、（前年に専売公社が新発売の煙草「ひかり」の宣伝のため「ミスひかり」というミスコンを行っていたので）岩田屋でミスター光コンクールを開きました（禿げ頭の光、色、形状などを審査し、等〔頭〕級をつけ、ミスターや準ミスターに選ばれた人はミスひかりから賞品が授与され、参加者にも電球などの記念品が贈られた）。

福岡光頭会は事務局を春吉の真髪神社[3]におき、当時西日本相互銀行社長の東令三郎氏を会長にたて、福岡の禿

「福岡光頭会」の頭光下の盟

げた著名人を集め、「もう（毛）ておくれの会、けがなし祭り」を開き、光頭者どうしの禿げはじめの若い頃の苦心談を楽しく語らい、「禿げている人ほど社会を明るくするのだ」とハゲましあう座談会を開いたり、三月の「緑の週間」に合わせて、光頭会員がハゲた地面に木を植えようという「お笑い植樹まつり」（南公園動物園前庭）などを催したりしていたようです。

その後、当時市長候補の奥村茂敏氏を会長に立て、「福岡銀髪会」もつくり、ミスターのみならず、ミセス銀髪なども選ばれ、賞品は竜宮城の乙姫さまに扮したミス福岡から、白髪昆布など白のつくものがぎっしり詰められた玉手箱が贈られたのでした（この会の準備期間中に奥村氏は市長に当選した）。

この「福岡銀髪会」では、豆腐の白さになぞらえて「野立田楽茶会」（筥崎宮）、「白魚供養祭」（室見川）などを行い、銀髪会・光頭会親善の「観月の宴」なども開いたりしていたようです。

昭和二十九年頃から、毎年福博在住の文化人約五十人に書画を依頼してまわり、筥崎宮の放生会では献灯図が飾られるようになりました。昭和三十一年には、諭吉が発起人

博多仁和加振興会の面々

筥崎宮放生会灯籠絵「神泉苑の水神」（田中諭吉書）

の一人となって「博多仁和加振興会」を設立したり、趣味で「西街道和楽路会」や「九州漫画協会」（略して「九漫」）でもユニークな企画や運営を始めたようです。

「西街道和楽路会」というのは、昔の道中風俗に習って、男女とも手甲脚絆、道中合羽、菅笠、振り分け荷物のいでたちで、春秋二回、神社や仏閣を参拝するという一種の健脚を奨励する団体です。いつもは末永節会長（玄洋社）を昔風に駕籠や車に乗せたりして、これを中心に擁して道中するのですが、今度参拝する宮地嶽神社には殿様道中の輿があると聞き、これを借りる予定でしたが、会長が「わしは下っ端士族の足軽出身だから殿様の輿など乗りたくない」と言うので、諭吉は「大久保彦左衛門の故知にならってタライで登宮とはいかがでしょう」と提案し、神社側にタライの製作を願い、会長をタライに乗せての道中行事の後、書の巧みな会長にタライの中に「長寿」の文字を揮毫させ、神社に返却し、その後、宮地嶽神社では赤ん坊の初詣のお祓いと祝詞の後にこのタライで「長生初湯の儀」（この水なしのタライの中に着物のまま入れる）を行うようになりました。

はなの下試胆会

ある年の春、諭吉は九漫の仲間と酒を酌み交わしながら、戦国時代の織田軍の焼き討ちに屈しなかった快川禅師の「心頭滅却すれば火もまた涼し」の禅語のように、人間の観念を一度逆の形においたらどんな結果を生ずるだろうかという話をして、「人間の尿はビールに似ている。そこで、ジョッキの代わりに病人用の尿瓶にビール、オマル（便器）に人糞そっくりの料理（カレー）、唾吐き器に山芋のとろろおろし、膿盤にマヨネーズやトマトケチャップで外科手術後取り出されたと思わせる料理、ユルリガトールにジュース、箸のかわりにピンセット、給仕嬢は看護婦姿といういでたちで、試食会を催すのはどうか」と冗談半分で言ったところ、一同眉をひそめて苦笑したものの、酒の勢いもあって賛成する人もあり、九漫の主催で「はな（花、鼻）の下試胆会――倒錯観念心理実験」と題してこの馬鹿げた企画を実行することになりました。ちょうどその頃、志賀島水族館の広場に桜の木を植えたので、その下で何か催してほしいという依頼があったのです。

諭吉はこれまで企画に協力してきたいくつかの商社に相談し、ビールや酒などを集め、訳を話して知人の医療器店から新品の器具を借り受け熱湯消毒し、以前、諭吉が野立の故事にならって田楽茶会を企画した田楽料理屋の女将にたのんで、板前さんに人間の排泄物そっくりの

「はなの下試胆会」の記事（毎日グラフ別冊「サン写真新聞」1958年４月５日より）

で出てもらいました。参加者は主催の九漫会員七名、著名な博多人形師、彫刻家、劇評家など十名で、こんなことくらいビクともしない猛者ぞろいでした。

三十人ばかり詰め掛けたマスコミにせかされ、挨拶も抜きに午前中から早速実験にとりかかりました。まずは、医者と看護婦さんによっての盛り付けで、桜の木の下にはユルリガトール、唾吐き器には山芋のとろろおろし、オマルには半熟卵がけのミンチボール、膿盤には豆腐や鶏のもつでできたものに、ケチャップやマヨネーズであしらったもの、フラスコには酒が、五徳の下にアルコール形に美味しい料理をつくってもらうことになりました。看護婦服は、日赤の知人から一切新調の服装を借り受け、料亭勤務の娘さん三人、板前さんには医師の白衣姿ランプでカンがつき始めるといった趣向でした。

看護婦さんに注いでもらったビールの入ったジョッキならぬ尿瓶をみんなでカチリと打ち合わせ乾杯し、勢いよく呑み始めたところ、鼻までビールがかかるという出のよさで、この容器はもともと呑むために作られたものではないことが分かりました。この尿瓶は呑んでいる人の顔がおかしくひずんで見えるのがご愛嬌です。

呑むほどに酔うほどに猛者たちは、意気昂然としてきましたが、一人だけ呑めない会員は、唾吐き器のとろろをいただく段になって、排泄物でも連想したのか、こらえていた観念の関が切れた模様で青くなり、本当に吐き気をもよおして、口をおさえて席をはずすという始末で、実験反応者の第一号となったのでした。

この型破りなイベントは全国版の写真新聞やグラフなどでも大きく報道され、その後、第二回は西公園で開催されました。第二回目ではオマルにカレーを盛り、その上にはご丁寧にちり紙をひねったものまで添えられていたそうです。

九漫ではこの他にも「カカシ展（コンクール）」や「お笑い生け花展」、「お化け展」、「漫画合戦」などさまざまな面白い企画を催していたようです。

＊

昔から炭坑地方の駅継ぎの町として、また新四国八十八カ所の霊場としても有名な篠栗町では、石炭不況で閉山した鉱業所も多く、重要な町税収入であったこれらの租税があてにできなくなり、反面、風光に勝れたこの霊地を観光的に生かすべく、当時の町長は思案していました。昭和三十三年頃、諭吉の知るS元陸軍中将の斡旋で、この霊地にビルマの仏教連合から「仏舎利」が贈られることになり、これを篠栗町の小高い展望の利く山上に祭祀する「仏舎利殿献立」の企画が立てられ、福岡県仏教連合会の後援のもとに基金募集が行われていましたが、なかなか集まらなかったようでした。

そこでS元中将と某僧侶の紹介で、篠栗町長から諭吉のところに、仏舎利殿建立の宣伝的企画に協力してほしいとの依頼がありました。諭吉は、その頃近づいていた釈尊の生誕会「花まつり」を利して、大丸で「お釈迦様大展覧会」を企画しました。福岡県仏教連合会主催、福岡県教育委員会後援という形で、会期の前日には篠栗町からのりこんだ稚児による、仏舎利の入った金色の小型の龕を会場の大丸へと運ぶ遷仏行列を行い、会場では仏舎利殿建立の趣旨や鳥瞰図の他に、県下の釈尊像や仏教に関する古文書などを展示し、仏舎利を祭った祭壇の前では毎日各宗輪番による供養行事や奉納行事が行われました。

このPR企画によって、寄付もスムーズに集まり、それから三年後の昭和三十六年五月にこの仏舎利殿は完成し、篠栗町の観光の目玉となりました。

「福岡風俗文化研究会」発足

昭和三十四年、当時の皇太子明仁親王殿下と正田美智子嬢の婚約発表があり、これを記念して「皇太子、美智子嬢御成婚記念、華燭の典、時代風俗ショウ」というのを企画しました。もともとは南都地域にある那珂川畔に面した水炊きの有名なS園という料亭が、百畳近い大広間の完成を期に、結婚式や披露宴の会場として宣伝したいと諭吉に相談があったのです。

しかし、営利目的の店が主催する企画では、マスコミが取り上げることはないので、諭吉はかねがね親しくしている地元の美術家や著述家、劇評家、歴史家、美容や服飾の先生方などに事情を話し、お互いの研究機関を作る目的で「福岡風俗文化研究会」を発足させることとし、この発会式を兼ねてこの企画をS園の大広間で行ったのです（ちょうど皇太子ご成婚の約一カ月前の三月三日）。

この企画の内容は日本の今昔結婚風俗で、「一　神代の巻、二　王朝時代の巻、三　鎌倉時代の巻、四　徳川

時代武士の巻、五　同町人の巻、六　現代和装の巻、七　同洋装の巻」と題して約二時間半にわたるショウで、服装は現代の巻以外はすべて京都の時代物衣装店から借り受けました。

当日は、舞台の上に神代から王朝時代、皇太子に似たアルバイトの青年に衣冠束帯を、正田美智子嬢に似たモデルに十二単を着せて、あたかもご成婚はかくやとばかり奏楽などを入れてムードを出し、華やかに展開したそうです。

ちょうど皇太子御成婚間近で、この企画は時宜に適っていたため大変好評で、この時来場していた新天町商店街の宣伝部委員から、これと同じ企画を新天町会館でも二日間にわたって行ってほしいとの申し出があり、諭吉はさらに企画を練り直し、いよいよ御成婚まであと数日という日に、各時代ショウの風俗をそれぞれ曳屋台に乗せ、先頭には日向国の風俗「シャン・シャン馬」の花婿が手綱をとり、花嫁が馬に乗って道中する徳川時代の風俗を加え、新天町を行進しました（皇太子明仁親王殿下は四月十日に御成婚された）。この時設立された「福岡風俗文化研究会」は博多人形、博多織、筑前しぼりなど様々な工芸家の多い福博の正しい時代風俗の考証のための機関として、後に「博多人形ファンタジーショウ」など諸種の文化の向上に資する催しを行うようになりました。

櫛田神社大おたふく面・飾り山笠・集団山みせ

昭和三十六年一月、六十歳を迎えた諭吉は新聞社を定年退職し、その後も西広や大広などで企画の仕事を続けました。同年二月、櫛田神社節分厄除大祭では、「大福桝」や、福が来ぬならこちらから飛び込んで行こうという趣旨の「大おたふく面の福くぐり」などを企画して、今でも節分になると、櫛田神社の入り口には、大おたふく面が現れ、おたふくの口をくぐってお参りするようになっています。

博多祇園山笠は、博多っ子が誇る櫛田神社のお祭り行事の一環ですが、「追い

櫛田神社・節分おたふく面

「永代奉納番外飾り山笠」企画書（田中諭吉書）

山笠」は交通事情や見物場所などの問題で、遠方の人はもとより、博多の人でさえもなかなか見られないというのが現状でした。山笠は古い伝統を大切に守り、先輩から後輩へとしきたりがひきつがれるものですが、もっと視野の広い通りで見られないものか、要するにパレード方式にできないものか、という案と、「飾り山笠」を博多総鎮守の櫛田神社境内に常設して、同神社の知名度を高め、広くは博多への観光誘致を図ってはという案が大広九州支社の中であがっていました。

そこで諭吉は「伝統のやかましか山笠ですけん、なかなか難かしゅうござっしょうや。そればってん、一石二鳥でみんなが喜んでもらえることですけん、言うてみまっしょう」と、正式に博多祇園山笠振興会に提議したのですが、案の定、「けんもほろろですばい」で、第一回目の返事が返ってきました。

しかし、大衆が求めているもの、喜んでくれることで、大局において伝統の精神を逸脱していなければ、少々の抵抗の壁があっても、将来必ず分かってもらえるものだと、あきらめずに、その後も書画の巧みな諭吉は説得のための趣意書（企画書）などを描いてねばり強く交渉し、当時の振興会会長や幹部役員の大局的判断で、ようやく実現へと動き出しました。

そしてついに昭和三十七年には博多祇園山笠振興策として、「集団山笠みせ」が始まり、第一回目は昭和通り日通前を起点として、博多の知名士や振興会、各流れの長老が台上がりされて、大通りを一直線に走り、那珂川を初めて渡って、福岡中央郵便局前に各流れが勢い水をかぶりながらゴールしていきました。この時の感動は一入だったことでしょう。そして昭和三十九年には「永代奉納番外飾り山笠」として櫛田神社の現在は手洗い場の横に飾り山が常設されるようになりました。

曲水の宴

昭和三十七年の春頃、かつてより観光連盟の会合で知り合いの太宰府天満宮の御田義清禰宜のところへ諭吉はひょっこり訪ねて行き、「梅花の下で曲水の宴ばしたら風雅でよござすバイ」ともちかけました。

「曲水の宴」というのは、中国で今からおよそ一六五〇年前に文人墨客が蘭亭という所で催したと記されており、日本では宇多天皇（平安時代）の頃に定められ、天満宮では村上天皇の御代大宰大弐小野好古（よしふる）が行ったことなどの史実から、太宰府天満宮とも関係が深いのでした。

「こげなとば天満宮の池でどうでっしょうか」と諭吉が見せた一冊の古びた本は、王朝絵巻風の装束で、鴛鴦頭の船に座乗したみやびやかな雅楽と舞の絵図でした。しかし、天満宮の池で実施するには難点が多く、陸にあがった「曲水の宴」という発想が生まれたのです。

かくして諭吉の呼びかけで、祝部（はふり）至善、松尾芳青さんら、福岡風俗文化研究会、福岡美容師会の協賛動員となり、昭和三十八年三月第一日曜日から「曲水の宴」が実施されるようになりました。梅花咲き匂う第一回目の開催では諭吉一家も総出で、妻美沙緒は短歌朗詠、当時九大生だった三人の息子たちは警固の衛士姿で参宴し、曲水の杯には、県産三大清酒の「万代」、「花の露」、「富の寿」が注がれ、スポンサーとなってもらいました。

曲水の宴

この時、「曲水の庭」の造園に関しては、九大農学部の加藤退介教授の指導で昭和三十八年第一期工事が完成しましたが、加藤教授はがんとして謝礼を受け取ろうとはせず、そっくりそのまま御初穂料として献上されました（その後、加藤教授は昭和五十五年十月十六日に享年六十歳で亡くなられました。その十日後には加藤教授が九大で主催する日本造園学会で「曲水の庭」に関する論文を発表する予定でしたが、残念ながら未発表となってしまいました）。

昭和四十三年三月三日には、第六回曲水の宴で雛人形に扮する「生写し雛まつり」を同時開催しました。この「曲水の宴」は毎年三月の梅花匂う季節に太宰府天満宮で催され、今も太宰府の春の風物詩として続いております。

諭吉の書画・勘亭流

勘亭流や書画も巧みであった諭吉は、昭和三十九年十一月に電気ホールで「真似写楽忠臣蔵　色紙展」という個展を開きました。諭吉の描いた忠臣蔵掛軸は今も南区寺塚の興宗禅寺に所蔵されています。昭和四十年二月には三奈木黒田家所蔵の「福岡博多古図」の精密な模写図が完成し（四畳半大）、岩田屋で展示される予定でしたが、事情があって門外不出となり今も我が家に封印されています。諭吉の書は西公園の「平野国臣銅像」の台座の字など、県内各地に彫られて残っています。

未完の勘亭流書体見本（田中諭吉書）

各流合同野点茶会

太閤秀吉がその昔、豆腐の味噌焼きを出した田楽茶会は有名です。また、秀吉が島津征討の時、千代の松原の筥崎宮の境内で野点茶会を開いた故事が、当時参加した博多の豪商神屋宗湛（そうたん）の日記に伝えられています。そこで諭吉は、筥崎宮の了解を得て、豆腐の白さになぞらえて福岡銀髪会主催という形で「野立田楽茶会」を開いたことがあったのですが、昭和四十年十一月三日より今度は茶道の各流派を一同に集めて「各流合同野点茶会」を毎年行うようになりました。第一回目はかしいかえんで行われ、その後福岡城址へと場所をかえ、約二十年間（諭吉の死後も十五年間）続いたそうです。

西公園光雲神社の「謡い鶴」

戦災を受けていた西公園の光雲（てるも）神社の復元奉賛会事務局長になった諭吉は、光雲神社の拝殿に賽銭を入れると天井の鶴がクワーと鳴く「謡い鶴」を考案し、天井の鶴の画を日本画家の木原信氏に依頼し、賽銭を入れて鶴が鳴く仕組みを当時工学部生だった三男（私の父）に設計させ、昭和四十一年に完成させました。

この「謡い鶴」のアイデアは、四男が太宰府の戒壇院という寺に勉強合宿していた頃、参拝客が寺の賽銭箱にお金を入れた時に、陰に隠れて仏壇の鉦をチーンと鳴らして遊んでいたのにヒントを得たそうです。賽銭を入れると音が鳴るので、不思議に思った参拝客たちは必ずもう一度確かめるために続けざまに賽銭を投げ入れたそうです。

昭和四十三年には、諭吉が下絵を描いた桜井神社外苑二見ケ浦の大鳥居（糸島）も完成しました。本当はこの海の中の大鳥居に蛍光塗料を塗ってライトアップする計画もしていたようです。他にも、東郷神社の埴輪型拝殿など、神社に関する企画はいくつも残っています。

博多仁和加振興会

博多仁和加が得意だった諭吉は、晩年はテレビやラジオなどにもよく出ていたようです。博多仁和加というのは、黒田長政が父官兵衛（如水）とこの地に封ぜられ、福岡と名付けても、川を境に博多の町民は自尊心が強く、てこずったため、年に一、二度、黒田藩の施政に対する憤懣と批判のはけ口を「にわか」の形式で発表させたもので、演技者の顔が知られないように顔を隠すためのかぶりものなどをして、後に半面（マスク）をかけ、城内や福博の町々で行わせ、武士たちが聴いたのに端を発すると言われます。諭吉は、博多仁和加振興会を作り、「盆にわか大会」、「仁和加大臣に物申す会」（ＲＫＢラジオ）などを開き、仁和加の保存育成にもつとめていたようです。

同じく仁和加が得意だった岩田屋の故・中牟田喜兵衛社長との間でもこんな仁和加のやりとりがあったそうです。「田中さん、あなたはウチの店に来てもらっては困りますバイ」、「そらアなしですな」、「バッて、あなたの頭じゃ儲け（もう毛）がない」。すると諭吉は、自分の禿げ頭をなでて「私が来たら、店に光線（口銭）の入りますバイ」、「いや、負けました、サアどうぞ」と商談開始。

昭和三十九年五月二十五日に放映されたＮＨＫの「新日本紀行―博多」（その後三回再放送された）では、博多仁和加以外にも曲水の宴や福岡光頭会が紹介されたそうです。

最後の企画「荒津まつり」

昭和四十五年、西公園付近の古い歴史をもつ荒津地区を発展させるため、諭吉は荒津港を舞台に展開された大陸との交易、文官・武官・僧侶などの往来、といった古

代ロマンを再現する「荒津まつり」を企画しました。

ところがこの「荒津まつり」の打ち合わせ中（同年二月）、突然吐血し、当時大濠公園の傍にあった国立福岡中央病院に入院、胃がんの手術を受けましたが、輸血によって血清肝炎になり、腫れた肝臓が腸に癒着したのに気がつかず（医師は腹水と勘違いしていた）、腸が詰まり、気付いた時には手遅れで、入院からわずか半年の同年九月五日、享年六十九で諭吉は他界しました。

入院中も荒津まつりの準備状況が気がかりで、手術後病院を抜け出し、「遣唐使の船出ショウ」に僧侶に扮して参加していたようです。最後まで病室の窓から祭りの様子を見守り、この「荒津まつり」企画が諭吉にとっての最後の仕事となりました。その後も「荒津まつり」は西公園の夏祭りとしてしばらく続き、「大濠まつり」（第二部は秋）に統合され、今でも時代行列や「荒津の舞」は続いています。昭和四十五年九月九日に積善社で行われた諭吉の葬儀に九漫からおくられた追悼漫画にはこんな仁和加も入っていました。

「今日、祭壇に飾られて、田中さんなどげん思いござろうかね」、「きまっとるくさ、〃これが斎場（最上）の特等（禿頭）席たい〃と言いござる」、「今でも田中諭吉さんのそばに付いとう（追悼）」

タイトルにもある諭吉のニックネームは、ある時、博多町人文化連盟事務局長の帯谷瑛之介氏が諭吉を人に紹介する時に「この人こそ無毛（形）文化財です」と言われたのが気に入って、さらに禿げ頭であるため「光頭」を付け加え、「光頭無毛（荒唐無稽）文化財」と自称するまでになったそうです。

「われ人とともに喜びと笑いを分かち合おう」と生涯ユーモアを追求し続け、その輝く光頭で戦後の社会を明るくした彼の死後も、「集団山みせ」や「永代奉納番外飾り山笠」、「曲水の宴」などが伝統的文化として定着し今尚生き続けていることは、本人も企画者冥利に尽きるだろうと思います。

＊

田中諭吉博多人形（西頭哲三郎作）

以上見てきた彼の企画の成功の裏には、多くの人々の協力があったことは言うまでもありません。諭吉のみならず、戦後の日本の文化復興には多くの人々の苦労があったことは想像に難くありません。彼らの足跡を辿ってみると、当時の大衆の精神史的な側面も読み取れます。

【参考文献】

田中諭吉『企画奥の手』積文館、昭和三十六年

田中家一同『有無庵追憶』（十七回忌記念追悼文集）昭和六十一年

田中諭吉のホームページ（三男・田中卓史作成）

http://hiara.cs.fit.ac.jp/~yukichi/

＊田中諭吉に関する情報をお持ちの方はぜひお寄せください。

〒八一〇―〇〇二一

福岡市中央区今泉二―四―六五　JGM1502

田中美帆

注

（1）非常時局大展覧会：昭和8年。「非常時」は当時の流行語だった。日本の国連脱退の要因となったリットン報告書などを展示。毎日一―二万人の入場者があり、期間十日間で十五万人の来場があった。

（2）支那事変初盆大追悼会：昭和十二年七月十三―十五日。支那事変で初めてでた戦死者（福岡の師団が出勤のため）を新聞社主催で慰める法要企画。費用は軍需工業で景気のよい大手鉱工業者から寄付を仰いで福岡市仏教連合会の後援という形で行った。当時の陸軍大臣板垣征士郎中将に大位牌を書かせ、仏教でいう色調紺地に金糸の「大威徳明王曼陀羅」なるものを博多織で作って百畳敷天幕二張りを、那珂川尻、須崎裏広場で、時間を定めて仏教各宗の輪番奉仕で大法要を行い（各宗派間の競争意識が高まり、各宗最高の盛大な法要となった。日蓮宗は東公園銅像前より、須崎の会場まで五百名余の大万燈行列を繰り出した）。連日参詣者は絶えず、最終日の那珂川畔での英霊を慰める花火大会は多くの市民に歓迎された。

（3）真髪神社：ある官幣社に仕えていたF氏という敬神家が、終戦後、その子女たちに床屋の職業を習得させ市内の東西の盛りの好場所に理髪館を経営させた。敬神深いF氏は、髪は神に通ずるとして、春吉の広い自宅の庭に昭和二十九年十二月一日、「真髪神社」と名付ける、本邦初の珍しい神社を創建した。この神社は人間の頭髪、すなわち理髪館や美容院で刈り取られた髪の毛や抜けた毛に、その人の姓名や生年月日を書いた袋におさめて神前に供え、家運の繁栄や、健康増進などの開運祈願を行い、後に境内にある「奉理塚」に永久に納めて祭るという神事が行われる変わった神様である。

▼田中諭吉略年表

明治34年（1901）1月29日　博多・川端の焼物屋の長男として生まれる（祖先は博多の廻船問屋）。呉服尋常小学校卒業（将来学者になるのが夢で、成績はオール甲）。実家が貧しかったため、鹿児島の伯父の家（印刷業）で住み込みで働きながら鹿児島一中に通う。

大正6年（16歳）父（長吉）が他界したため、博多の実家に戻る。この時、墓石に彫るための字を書く（西教寺）。絵を描くことが好きで、家業の焼物屋を廃業して、画廊を始める。独学で書画を描き始める。

昭和元年（25歳）中洲の米屋の娘、藤野美沙緒と結婚。

昭和3年10月（27歳）福岡日日新聞社（のちの西日本新聞社）に電送写真が導入され、絵を描く人を急募していたため、入社する（社会部絵画班）。のちに、同僚に長谷川町子氏。

宗像大社を交通安全の祖神として新聞で宣伝し始める。

昭和8年8月（32歳）独逸ハーゲンベックサーカス開催。「非常時局大展覧会」無料開催（リットン報告書展示）。

昭和10年11月25日（34歳）「余太吹日五人男」企画・実演。

昭和12年7月13―15日（36歳）「支那事変初盆大追悼会」企画・開催。

昭和13―14年（37歳）香椎・櫛田・住吉の各神社に絵馬を奉納（協賛企画）。

昭和17年9―10月（41歳）「大東亜建設博覧会」開催（西新・百道松原）、館長。

昭和18年（42歳）出兵の帰還祈願の「虎の掛け軸」を書き、食糧と交換。

昭和19年（43歳）筥崎宮に必勝祈願の絵馬を奉納。宇佐神宮造営竣工記念兼戦勝祈願行事。「和気清麿一代記画」十五面、「元寇覆滅図」二面奉納。記念品「勝土器」贈呈（高取焼）。その後宇佐神宮の土産物となる。

昭和19―20年（43―44歳）「八幡大菩薩」の旗と筥崎宮の神額「敵国降伏」の縮小掛軸を輸送船に贈り、敵制海を航行する船員たちの士気を高めさせる（福岡県知事吉田茂氏と宇佐八幡宮司に「八幡大神」の書を依頼）。

昭和20年8月15日（44歳）終戦日に赤紙召集令状が届いたため、徴兵を免れる。

昭和20―22年（44―46歳）**新天町商店街**設立計画（西日本新聞社戦後対策本部主事）。

昭和25年（49歳）「躍進日本水産展覧会」。志賀島に仮設水族館をつくり、後に西日本最初の**志賀島水族館**設立の契機となる。

9月　「三百七十年忌、明月まつり」（新柳町繁栄企画おいらん道中）。

秋　「カカシ展」（コンクール）開催（於岩田屋屋上）。

11月18日　「福岡光頭会」結成（会長に西日本相互銀行社長）。ミスター光コンクール開催。

昭和26年（50歳）「浅草観世音出開帳」（岩田屋で開催）岩田帯の無料配布。「法灯の火」、「大わらじ」展示、鳥の供養行事。

昭和29年（53歳）**筥崎宮放生会献燈図**（福博在住の文化人50人に書画依頼）。以後継続。

昭和30年11月（54歳）第2回「カカシ展」開催（九漫主催）。

昭和31年4月（55歳）九州漫画協会顧問「エイプリル・バラエティ・ショウ」（九漫30周年）。

春　「真髪神社」（昭和29年12月創建）の不気味な石に「なやみ石」と名付けて玉垣に入れたところ、本当にご利益が広まる。のちに博多人形師がつくった「なやみ解き鈴」（土鈴）がお守りとして社務所で売られるようになる。

6月　**「博多仁和加振興会」**発起人・設立（初代会長に奥村茂敏氏）。西街道和楽路会で企画・運営を始める。

昭和32年（56歳）「天神まつり」武蔵坊弁慶安宅の関の一幕実演（西広）。

春　「もう（毛）ておくれの会、けがなし祭り」（真髪神社春の大祭）。

「福岡光頭会」の事務局を「真髪神社」におく。

「お好み焼き合戦」企画・開催。

昭和33年3月　「緑の週間」福岡光頭会「植樹まつり」（ハゲた不毛の地に木を植えよう）。

春　**「はな（花、鼻）の下試胆会―倒錯観念心理実験」**（九漫）。新品の尿瓶にビール、オマルにカレーで試食会（第1回は志賀島、2回目は西公園）。

4月　花まつりに「お釈迦さま大展覧会」（大丸で開催）。篠栗町仏舎利殿建立基金企画。県下の釈尊像や、絵画、古文書、仏舎利入りの金色の龕を展示。毎日、各宗輪番による供養行事、奉納行事（1週間）。

10月　**「福岡銀髪会」**結成（会長に奥村茂敏市長）。ミスター銀髪コンクール開催。

12月　「えびすまつり」（櫛田神社夫婦恵比須）。「三日えびす」。

昭和34年3月3日（58歳）**「福岡風俗文化研究会」**（代表田中諭吉）発会式兼「皇太子、美智子嬢御成婚記念、華燭の典、時代風俗ショウ」企画。

盆　お盆の子供遊びに「がん灯ともし行列」（男子）、「灯籠ともし行列」（女子）再現。

昭和35年8月（59歳）「福岡南都開創五十周年記念、南都まつり」（山笠非建設代案）。「新作南都おどり」ヒット。

11月　九州漫画家協会総会。宴会でプロレスごっこ。

昭和36年1月（60歳）西日本新聞社還暦定年退社後、西広、大広などで企画の仕事を続ける。

2月　櫛田神社節分厄除大祭企画「大福桝」、**「大おたふく面の福くぐり」**。

2月末　「博多人形ファンタジーショウ」（於電気ホール）。

小島与一氏激励。

5月　篠栗町「仏舎利殿」完成。

6月　著書**『企画奥の手』**（積文館）出版。

昭和37年夏（61歳）**「集団山見せ」**発案・実施（博多祇園山笠振興策）。

福岡県婦人新聞創立10周年記念、社名題字執筆。

昭和38年3月（62歳）太宰府天満宮**「曲水の宴」**再現。

11月　「にわか鉄道」、「銀杏会」縁結び記念他流試合。

12月21日　「仁和加大臣に物申す会」（RKB公開録音）放送は大晦日。

昭和39年5月25日（63歳）NHK「新日本紀行―博多」放送。

夏　**「永代奉納番外飾り山笠」**発案・実施。

11月　**「真似写楽忠臣蔵　色紙展」**（田中諭吉作品個展。於電気ホール）。

昭和40年2月（64歳）三奈木黒田家所蔵**「福岡博多古図」**模写。

田中諭吉十七回忌記念追悼文集『有無庵追憶』
（背景の勘亭流は諭吉書）

5月　長沢吉太郎氏**『かつらの極意』**出版記念会企画。

8月　光雲神社復元奉賛会事務局長就任。

11月3日　第1回**「各流合同野点茶会」**（その後20年間続く）。

昭和41年（65歳）西公園光雲神社拝殿に賽銭を入れると天井の鶴が鳴く**「謡い鶴」**を考案（天井の鶴の画は木原信氏に依頼）。

昭和43年3月3日（67歳）**「生写し雛まつり」**、第6回曲水の宴で同時開催。

桜井神社外苑二見ケ浦の大鳥居建設。

昭和44年春（68歳）万葉歌碑除幕式**「荒津の舞」**（西公園）。

6月16日　「にわか鉄道」、「福岡大学落研」シャレ合戦（東公園）。

昭和45年2月（69歳）**「荒津まつり」**の打ち合わせ中に吐血（「まつり大濠」の前身）。手術後、病院を抜け出し「遣唐使の船出ショウ」に僧侶に扮して出演。

7月　「寸言没供養会」。

9月5日　69歳で永眠。

昭和46年　**東郷神社「はにわの拝殿」**完成。

昭和48年　西頭哲三郎氏作**「田中諭吉博多人形」**。

昭和61年9月6日　十七回忌記念「故田中諭吉を偲ぶ会」。追悼文集**『有無庵追憶』**発行。

昭和62年7月2日　RKB「朝の情報BOX」放送。リポート「広告・イベントのパイオニア　田中諭吉」。